

第 1 回ワーキンググループ発表資料 論点に対する意見の発表

2023/11/02 東京都立大学 饗庭伸

【論点 1】 国が示す方向性の再構築

⇒スマートシティが何を実現するかストーリーや将来像を見据えつつ、都市局としてリソースを集中すべき分野を見極めるべきではないか。

【論点 2】 各スマートサービス「実装化」のゴール設定

⇒計画から実現（横展開）までのプロセスの整理と「実装」の定義明確化

⇒論点 1 で提示した「分野」ごとに、どこまで何をしたら「実装」と定義するか。何を指すのか。

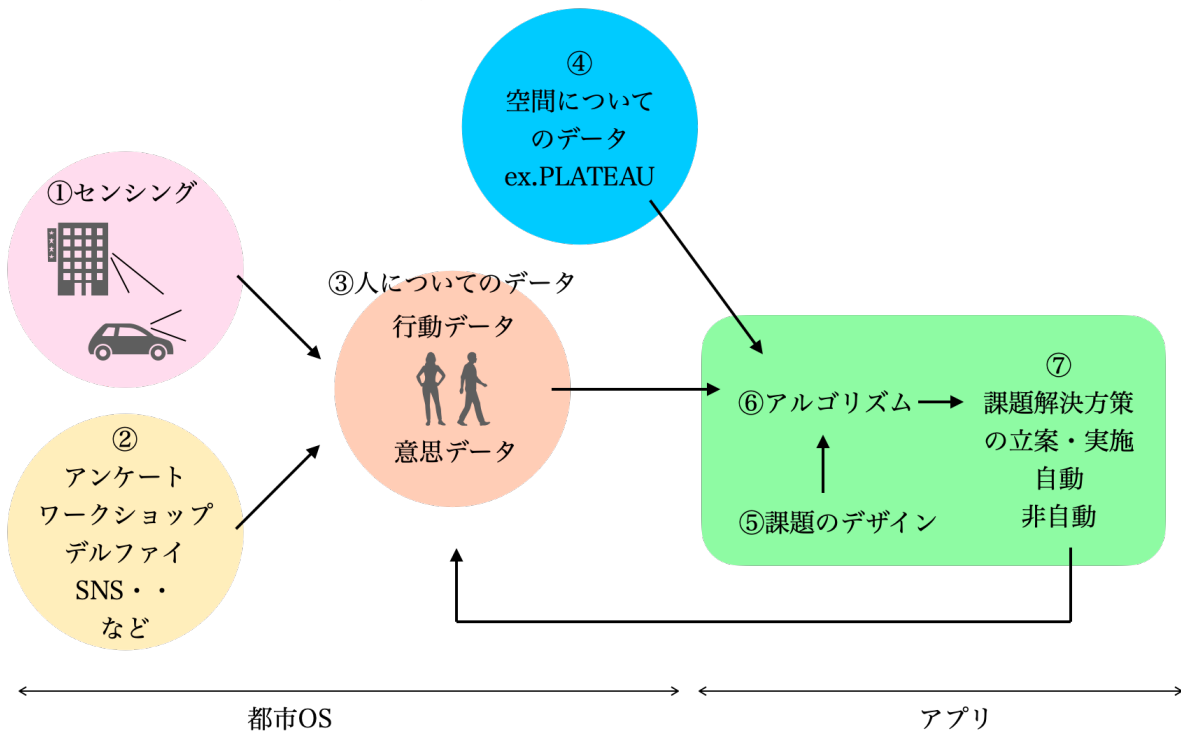
⇒実験的な取り組みを行う「実証実験」を住民のウェルビーイング改善までに結び付けるために国・自治体・民間企業が果たすべき役割は何か。

【論点 3】 スマートサービスが自然と創発されるエコシステム形成の方策

⇒法令・予算制度等を活用し、どのようにインセンティブを与えて「回る」仕組みにするか。例えば、SC 実装事業の推奨メニュー化、都市計画・市街地整備の中にビルトインすべきか。

⇒自治体・民間企業とどのようなコラボレーションを行うか。例えば、都市局が 2・3 の自治体を集中的に支援し、モデルとなる事例を作り出し横展開を図る。また自治体間の研修・情報共有やイベント（「サミット」「グランプリ」等）の開催等。

- 1) これまでの「先進地域のスマートシティ実行計画・取組内容」([https://www.mlit.go.jp/toshi/tosiko/toshi\\_tosiko\\_tk\\_000051.html](https://www.mlit.go.jp/toshi/tosiko/toshi_tosiko_tk_000051.html))の「概要」を拝見したが、この企画書通りに出来ているのならば、種まき、頭出しとしては十分ではないか。個々の技術の良し悪しは、使ってみないと分からないが・
- 2) スマートシティの組み立てを図のように捉える。データ (③④) が何よりも重要なことは言うまでもない。空間についてのデータ (④) が PLATEAU であるとするれば、人についてのデータ (③) がもう一つのコアとなる (論点 1)。



- 3) 課題解決能力の高い都市＝スマートシティと考えると、都市 OS(①②③④)を継続的に鍛えつつ、日々顕在化するさまざまな都市課題に対する解決のアルゴリズムを含んだアプリ(⑤⑥⑦)を日々発明し続けることが必要となる。OS はゆっくりと、アプリははやく、というふうに分けて考える。OS までを国の役割と考えるか、アプリまでも仕掛けていくのか？(論点 1、2)
- 4) さらに、「都市課題を空間を使って解決する」のが都市計画なので、⑦で空間を使った課題解決方策を出していくことが重要。④空間のデータを組み合わせることの意味もそこにある。(論点 1)
- 5) ①センシングと③人についてのデータはどんどん増えていくので課題は少なそうだが、国土の中で格差が生じることには注意が必要かもしれない。スマートフォン、自動車、家電、建物、インフラの新築更新が進まないと、センサーが増えず、データが集まらず、よい課題解決方法を導き出せないことになる。もし格差がある場合は、どういう方法でセンサーを送り込むのかを考える必要がある。(論点 1)
- 6) ③人のデータのうち、行動データはたくさん集まっていると思われるが、意思データ(こうしたい、というデータ)を集める②の方法が弱いのではないか。例えば都市計画の立案のときに、市民意識調査のデータが全く使えなかったりする。行動データだけで未来をつくるのではなく、「こうしたい」という意志が入ることは重要なのではないか。なお、饗庭の専門はこのあたり。(論点 1)



- 7) ③人についてのデータについては、④PLATEAU のように目に見える形で整備し、さまざまな企業の活用を促していくとよいのではないか。この都市には、こういう人が暮らしており、こういう暮らしをしたいと考えている、というデータ。(論点 3)
- 8) 現在の取り組みを見ると、⑥アルゴリズムが、「交通渋滞」「ウェルビーイング」「災害」などしかない。基礎自治体の⑤課題のデザイン力が弱いのではないか。対話型で課題意識を深めていく何らかのアプリの開発もあるだろう。(論点 2、3)
- 9) アプリも OS も、使わないと進化しないので、現在に設定されている課題以外の課題を与えて、うまく解けるかどうかはやってみてもよいだろう。例えば、新しい疫病が発生した、災害が発生した、予想外の開発が申請された、といったような課題を与えて、アプリで解いてみる。(論点 2、3)